

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

照美のママのさっちゃんは、照美を学校へ出した後、洗濯物を干して、ほっと一息ついた。そして、ダイニングチェアに座り、なんで今日は朝からこんなに疲れているんだろう、と考えた。

—— ああ、そうだ。夕べ夏夜^{かや}さんの一家が店にいらしたんだ。

夏夜さんというのは、さっちゃんのレストランの常連さんだ。年配の、白髪の美しい上品なご婦人だ。

これから、少し、夏夜さんのことをお話ししよう。

夏夜さんはいつも、ランチタイムの喧^{けんざう}噪の一段落した後に、午後のお茶を飲みにくる。その時間、パパはちよつと『一息入れ』に外へ出ていることが多いし、アルバイトの人も帰ってしまったので、お店では、さっちゃんが一人で夏夜さんのお相手をする。さっちゃんは夏夜さんのために丁寧^{ていねい}にポットを温めて、上等の紅茶の葉を準備する。混んでいるときは、とてもこんな^(a) 悠^{ゆる}長^{なが}なことはしてられない。もつとも、さっちゃんは夏夜さんのためだったら、どんな忙しいときでもそうやって、心を込めてお茶を入れたに違いない。

さっちゃんは夏夜さんが大好きだった。夏夜さんは、さっちゃんたちがお店を始めた最初の頃からのお客様だ。いつもあまり混まない昼下りの午後に、一人でふらりといらしてミルクティーを注文するのだった。

さっちゃんは、最初から夏夜さんのことを感じのいい方だなあ、と思っていたが、よく知り合うようになったのは、純^{まこと}が亡くなつて、そのお葬式などのためにお店を休んだ後のことだった。

「しばらくお休みでしたね」

その日、いつものように注文した後、夏夜さんはいった。

「ええ。息子がなくなったのですから」

さっちゃんも⁽¹⁾ できるだけさりげなく答えた。

夏夜さんは「まあ」といって、息をのみ、それから帰るまでずっと何もいわなかった。その沈黙は、さっちゃんにはとてもありがたいものだった。帰り際^{きりぎは}、レジに立ったとき、やっと夏夜さんは口を開いた。

「おいくつでいらしたの？」

それはいかにも自然だったので、さっちゃんも、すつと返事ができた。

「七つでした」

「まあ」と、小さく夏夜さんは呟いて、おつりを差し出すさっちゃんの手を温かく握りしめた。そしていった。

「私の子も、七つで」

さっちゃんは、泣かなかった。もう大人だったし、働いていたのだから。でも、それから、夏夜さんは、さっちゃんにとって特別の人になった。

それから何度目の来店の時だっただろう。

外には小雨が降っていて、少し開けてある窓から、庭先に植えてある金木犀^{きんもぎせ}の香りが漂っていたので、季節は《 1 》口であつたことは確かだ。

いつものように、カウンターに近い窓際の席に座って、ぼんやり外を見ていた夏夜さんが、ぽつんと、

「私の息子は、ダウン症だったのよ」

と呟いた。

さっちゃんも、ダウン症のことは知っていた。純が軽度の、とはいっても知恵遅れだったので、児童相談所に通っていた時期があり、そのときダウン症の子たちとよくいっしょになったのだ。^(b) 人懐^{ひとぐは}っこく、優しい性質の子だなあ、というのがさっちゃん

の印象だった。

「私も、ダウン症のお子さんを知ってました。とてもかわいかったですけれど」

「そうなの。あの子達って、本当に天使みたいにかわいいのよ。でも、一目でその病氣⁽ⁱ⁾ってわかるから、例えば子どもを連れてバスとかに乗ると、一斉に視線が集中するの。最初のうちは、それがいやで、いたたまれなくて……」

夏夜さんは、思いだしたのか、少しつらそうに笑った。その気持ちはさっちゃんにもよくわかった。きつと、小枝のように繊細だったに違いない、夏夜さんの若いお母さんの頃が目に浮かんだ。

「でも、そのうち、何？って、一人一人見返すようになったの。何？ 何なの？ 何でそんなにじろじろ見るのよって。闘うように、一人一人の視線を質^{ただ}していくのよ」

目の前で、微笑^{ほほえ}みながら静かに語る夏夜さんは、ふんわりとしたブラウスのよく似合う、優しい風情^{ふぜい}の老婦人だった。とても、そんな強靱^{きやうじん}そうなどころがあるようには見えなかった。

「子どもを持つと、母親は強くなりますね」

さっちゃんは、こういう、当り障^{さわ}りのない常套句^{じやうとうく}をいっぱい知っている。お客相手をしているうちに蓄えたものもあるし、大人へ成長する過程で、人とたくさん交わるうちに身につけたものもある。そういうものを、きつと、『常識』と呼ぶのだろう。そういう意味ではさっちゃんは、『常識のある大人』なのだ。けれど、そういう『常識』な言葉を使うとき、さっちゃんは、何か虚^{むな}しい気がすることもある。言葉が上滑りしていく感じた。でも、場合によっては、何か守られている感じがすることもある。

このときは、虚しい感じがちりちりとした。^②夏夜さんはこういう感受性の敏感な人だった。

「本当に強くなったんだとお思になる？ 私は違うと思うの。それは、鎧^{よろい}みたいなのなの。心の一番柔らかな部分が傷を負わないように、ガードするのね。人によつてはそれが、丁寧な言葉づかいになったり、当り障りのない、受け答えになったりするのね。でも、それは、何か守らなければならないものがあるときだけでよかったのに……」

さっちゃんは、ききながら、自分の視線がだんだんうつむくを感じていた。夏夜さんは言葉を続けた。

「子どもが死んでずつと何年もたつても、私はまだ鎧を着けたままだつて気づいたの。はずそうとしたつて、もうそう簡単にははずれなかったわ。そして、そういうものつて、一旦^{いったん}気づくとそれはそれは重く感じるのよ」

夏夜さんは、お茶を飲むためにゆつくりと言葉を切った。こんなに優雅な夏夜さんのどこにそんな鎧があるというのだろう。^③刻

まれたしわの一つ一つまで、さっちゃんにはこの上なく美しいものに見える。

「今では、じろじろと息子を見た人たちの、悪意のなさもわかるの。^(c)ムジャキで、ちよつと⁽ⁱⁱ⁾たしなみがないだけなのよ。珍しいから、思わず見つめてしまったのよね」

さっちゃんは、純が知恵遅れだったということを、まだ夏夜さんには話していなかった。けれども、静かに語る夏夜さんの言葉の一つ一つが、さっちゃんの胸にしみわたった。

「なんだか、私のためにお話しして下さっているような気がします」

さっちゃんは、うつむいたままで、微笑みながらいった。

夏夜さんは、少し小首をかしげ、

「私も、なぜこんなこと、急にしゃべりだしたのかわからなくて、自分でもさつきからいぶかしんでいたの。でも、しゃべりながらわかったことがあるの。私には、ある時期、確かに鎧が必要だった。けれど、鎧を着ているつていう自覚がないときは、私ではなく、鎧の方が人生を生きているようなものだったのね」

さっちゃんは、そのとき、夏夜さんのいつてることが本当にわかっていたかどうか自分でもわからない。ただ、夏夜さんみたいな人を母親と呼べるつてどんな気持ちだろう、と、^④貧しい少女があこがれるときの、何か、哀^{かな}しさのようなものを感じていた。

——私、きつと、いつも自分の『母親』を探していたんだ。もの欲しげに……

さっちゃんは、今まででもずつと、母親の年齢の女性に、あこがれのような甘えのような感情をもつ自分に気づいていた。

——夏夜さんを、いつのまにか自分の母親に見立てていたんだ。それで夏夜さんが娘さんの一家を連れていらつしやったとき、あんなに寂しく思っただ……

さっちゃんは、ダイニングチェアに座りながらそう思った。

——おろかなことだ……

自分の実の母親が、厳しい、ユーモアのない（実際、さっちゃんは、おかあさんがにこやかに笑うのを見たことがなかった。皮肉で笑う以外は）人だったので、夏夜さんのようにふんわりとした女らしい趣味の服装をする感覚のおかあさんのいる家庭というのは、さっちゃんには想像もつかなかった。自分に服のセンスがないのは、母親のせいだと思っていた。スカートなんて、ほとんどはいたことがなかった。こういう仕事をするようになるまでは。

昨夜、夏夜さんは、娘さんとお孫さんを連れていた。さっちゃんは、もちろん、丁寧に應對したが、娘さんの、くつろいだ、打ち解けた様子や、夏夜さんのいかにも愛情に満ちた眼差しが二人に注がれるのを見て、……⁽⁵⁾ ああ、そうよね……と、^(d) ガテンした。

夏夜さんに娘さんがいるというのは、前にもきいたことがあった。考えてみればあたりまえのことだ。その方や、お孫さんが、夏夜さんにとって世界中で一番貴いものなのだということは。

さっちゃんは、ぼんやりと、曇った窓の外を見た。

——私の母親も、『鎧』を着ていたのかしら。だとしたら、生まれたときにそれを着込んだに違いないわ。いえ、それを着たまま生まれてきたのかもしれない……

さっちゃんは、ふふっと笑った。人生の楽しみを全て無視して生きる覚悟をした、悲観的で気むずかしい赤ん坊の顔を思い浮かべて。

——それなら、あの取り付くしまもなかった外見の内側には、⁽⁶⁾ 夏夜さんみたいな部分もあったのかしら。もしかしたら、父親が

死んでから、着込まざるをえなかった鎧だったのかもしれない……

さっちゃんは、そのときかすかに母親に対して痛々しいものを感じた。

（梨木香歩『裏庭』による）

問一 || (a) (d) の、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 ~~~~~ (i) (iii) の、本文での言葉の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ選びなさい。

(i) いたたまれなくて

ア その状況を許すことができなくて イ 気の毒で直視することができなくて

ウ その場にそれ以上じっとしていられなくて エ 言い訳のしようもないくらいに申し訳なくて

(ii) たしなみ

ア 節度 イ 趣味 ウ 心得 エ 常識

(iii) いぶかしんで

ア 困惑して イ 混乱して ウ 悩ましく思っ エ 疑わしく思っ

問三 — ①「できるだけさりげなく答えた」とあるが、さっちゃんがそのようにした理由として最も適当なものを次の中から選
びなさい。

ア 働く大人として、涙を見せてはいけないものだから。

イ 息子を失ったという悲しい事実に触れなくなかったから。

ウ 大好きな夏夜さんに余計な心配をかけたくなかったから。

エ 自分に起こった不幸は、他人に知らせるものではないから。

問四 — ①《 1 》にあてはまる語を漢字で答えなさい。

問五 — ②「夏夜さんはこういう感受性の敏感な人だった」とあるが、夏夜さんは何を感じ取ったのか。二十字以上、三十字以
内で答えなさい。

問六 — ③「刻まれたしわの一つ一つまで、さっちゃんにはこの上なく美しいものに見える」とあるが、何によってこのように
見えているのか。本文中から十五字前後で抜き出さない。

問七 — ④「貧しい少女があこがれるときの、何か、哀しさのようなもの」の説明として最も適当なものを次の中から選
びなさい。

ア 必要最低限の物事しか望めなくなってしまうというさびしさ。

イ 実現することがないと分かっているながらも望んでしまうむなしさ。

ウ 内面をしっかりと見ないまま、外見だけで欲しがってしまう浅はかさ。

エ 自分の現状を省みないまま、大それた望みを抱いてしまう浅ましさ。

問八 — ⑤「ああ、そうよね」とあるが、さっちゃんがそのように感じた内容を五十字以上、六十字以内で説明しなさい。

問九 — ⑥「夏夜さんみたいな部分」とあるが、それは何か。解答欄に合うように、本文中から最も適した二字の熟語を抜き出
しなさい。

問十 この文章の特徴の説明として最も適当なものを次の中から選
びなさい。

ア リーダー（……）を多用することで、夏夜さんの言葉によって揺れ動くさっちゃんの心の状態が追いやすくなっている。

イ 慣用句や比喻、倒置などといった表現法を多く用いることで、さっちゃんや夏夜さんの心の動きを捉えやすくなっている。

ウ さっちゃんの視点で語られる中で、他の人物についての細かな描写があるので、その心情変化が分かりやすくなっている。

エ さっちゃんの思考している部分の始まりにダッシュ（——）を多く用いることで、その思考の展開を理解しやすくなっ
ている。

二 次の文章は『ジョークとトリック』（織田正吉著）のあとがきで「おわりに——ユーモア感覚と四分法思考——」と題するものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

笑う。泣く。怒る。感動する。

人間は時に応じてさまざまな感情をあらわす。その原因は、もちろん大脳のなかの情緒をつかさどる部分が刺激されるからである。わたしは職業的関心から、そのなかでもとくに笑いとその原因になるおかしさについて考えつづけ、現在もそれをつづけている。^①その過程で、笑いを起こす原因の多くが先入観や常識を破壊することによっているのに気がついた。先入観と常識を別のものとして並べたが、二つはおなじものであることが多い。先入観は無意識のうちにみずから固定した観念であり、常識は必要に応じて他からワク付けされた観念である。先入観と常識というかわりに、固定した観念と固定させられた観念といったほうがいいかもしれない。

笑いは観念を固定させるワク、あるいは固定観念そのものをこわすことによって起こる。ということ逆にいえば、笑いの起こる理由を^(a)ブンセキすることによって、人間の観念がどのようなばあい、どのようにして固定するのかということを知ることになる。笑いを起こす原因であるおかしさは、単一なものではなく実にさまざまである。

息苦しい社会を反映してか、このところユーモアに対する関心がたかまっている。ユーモア感覚とは、ひとことでいってしまえば、とらわれない物の見方や価値観を持ち、自由な発想を生む精神のありようのことである。ユーモアで心にゆとりをとというのは考え方が逆転しており、自由な発想を生むゆとりのある精神がユーモアとして表現されるのである。

ここで常識という言葉を使ったけれども、言葉の持つあいまいさを避けるため、《常識》を二種類に分けておいたほうがよい。一つは、殺人はいけないとか、こういう文章を書いたり読んだりするための文字の知識とか、経済生活で物を^(b)バイバイするば

あいには対価を支払うといった、社会生活を営むうえに必要な、いわばスポーツの規則と同様のルールとしての常識であり、もう一つは、金魚は観賞するもの、オオカミは悪者といった先入観や固定観念という意味での常識である。

第一の常識、つまりルールとしての常識はできるだけ固定しなければならないが、^②第二の固定観念という意味での常識はつねに破壊することをこころがけたほうがよい。おとなと子どもの差は、おとなは二つの常識に束縛されており、子どもは二つの常識を二つながら持たないことにある。それぞれ半面ずつの欠陥を持っているのであって、第一の常識をわきまえながら第二の常識にとらわれないのが人間としての成熟であり、それを可能にするのがユーモア感覚である。

価値を判断するばあい、いいか悪いかという二分法によることが多い。たとえば、結婚生活を継続することはよいが離婚はいけない、^(c)フユウはよいが貧乏はいけないというふうに。本とテレビもしばしば二分法によって、本はいい、テレビは悪いと簡単に価値づけられる。

しかし、実際には、そしてまたごくあたりまえのことなのだが、本のなかに良書と悪書があり、テレビには良い番組と悪い番組があるというように、価値の座標には最低四つの領域がある。結婚の継続と離婚についていえば、つぎの四通りのばあいが考えられる。

- 1・A 幸福な結婚の継続
- 1・B 不幸な結婚の継続
- 2・A 幸福な離別
- 2・B 不幸な離別

ドイツのユーモア作家《人名》は『ふたりのロツテ』のなかで、少年少女向きの読み物で両親の離婚をあつかったことに對する非難を予想し、「たたくさんの子どもが両親の離婚のために苦しんでいる。しかし、その反面、両親が離婚しないために苦しんでいる子どももたくさんいる」と述べている。

ユーモア感覚は二分法による固定した価値観にとらわれず、たえず四分法で物を眺め、プラスのなかに含まれるマイナス、マイナスのなかに含まれるプラスを直感する。そして、^③常識が見落としがちな（i）（ii）を指摘し、その面を強調する。

④二分法の世界に安住する観念の固定した人には、それが俗にいう「X」、「Y」と見えるのである。ユーモアがしばしば気づかしさを伴うのは、二分法を絶対的な尺度とする固定観念への非難がそういう表情をとらせるのだとわたしは考えている。

笑いを低俗と見、忌避するのは、常識のもろさ、偏りに気がつかない人であり、現実の生活のなかの固定した主観を、白金とイリジウムの合金でできたメートル法原器のように唯一絶対の尺度とすることで共通している。二分法の目盛りを打ったこの尺度によると、「わたしは正しい。ゆえに、わたしと対立する意見は不正である」という結論がただちに出来る。「わたしは正しくないかもしれない。ゆえに、わたしと対立する意見のほうが正しいかもしれない。」四分法を自由にあやつるユーモア感覚はそういう思考をうながす。この感覚を持つ人の尺度はゴムでできており、自由に伸縮する。目盛りは固定していないのである。

観念の固定が、これまでにどれほど多くの対立や摩擦を生み、自由な発想を妨げ、人間を不幸にしていたかを考えてもみよう。「動かざること大地のごとし」というのは第二の常識、固定観念である。大地も動くかもしれない、いや動いたのであろうと考え、たのが大陸移動説を唱えたアルフレート・ヴェーゲナーであった。一秒一秒を正確に刻む時計を見慣れると、時の進行は宇宙のどの部分でも一定に流れるという固定観念を無意識のうちに持ち、それを疑わない。時間はある条件下では進行が遅れると考えたのは《人名2》である。肖像画は一定の方向から見たとおりに描くものという既成の画法を破り、横顔とほぼ正面を向く顔を一枚のキャンバスのなかに合成したのは《人名3》であった。発見や発明、新しいアイデアなど、創造的な営為はすべて第二の常識から自由になるところで生まれている。

ユーモア感覚は、現実の生活のなかで固定しがちな観念をゆさぶり、こわし、そして、もつとも飛翔した形として、ほら話やナンセンスの世界さえ構築する。

この世界には、三人がかりで見上げるのを継続しなければならぬほど高い大木が育ち、「ヤッホー」というかわりに、就寝前に「起きろよ！」と叫んでおくと、朝そのこだまが返ってくる大溪谷がある。頭の上にできた池にその本人が投身し、笑っている猫の身体は消失してもその笑いだけがただよって残る空間がある。そして、住民は一年に三百六十四回の「非誕生日」のプレゼントを贈られるのである。

以上は、アメリカ西部のほら話、落語「あたま山」、《人名4》の作品から拾い出した。現実にとらわれない、人間の自由な発想は想像のなかでこういうすばらしい世界をつくる。わたしはこれこそ人間だけに可能な貴重な能力であると思うのだが、実生活に密着し、実益だけを尊ぶ人には無価値と見えるらしい。

繰り返していえば、とらわれない観念から新たな価値観が生まれ、視野がひらける。世の中に無価値なものは何一つなく、反転図形の陰面のようにたまたま見落としているだけであるかもしれない。無価値なものですら「無用」という用がある、と庄子は説く。

「無用の用」は、無用のものでも役に立つばあいがあるという意味に使われることが多い。しかし、それでは意味あいが違う。「無用の用」を説くのに庄子はこういう比喻を使った。

大工の石という男が齊の国で一本の大木を見る。数千の牛を覆い、幹の周囲は百かかえ、高さは山を見下ろし、地上千仞のところから枝を伸ばすという巨木である。石がその木を振り向こうともせず行ってしまうので、木に見とれていた弟子が、

「わたしが大工になってからこのかた、こんな立派な木を見たことはありません。棟梁はなぜ見ずに行ってしまうのですか」とたずねると、石は答える。

「あれはなんの役にも立たぬ木だ。舟をつくれれば沈む、ひつぎをつくれれば朽ちる、道具をつくれればすぐにこわれ、門をつくれればヤニが出る、柱にすれば虫が食う。単なる散木だ。」

齊から帰った石は、その夜、夢を見た。^⑤夢に木の霊があらわれ、つぎのよつに語る。

「梨や柚、烏瓜などは実が成るともぎ取られ、そのために枝は折り曲げられる。役に立つからみずからを苦しめ、そのために本来

の樹齡をまっとうせず早々に枯れてしまう。わたしはなんの役にも立たないことを願いつづけてきた。そして、ようやく寿命も終わりに近づき、その願いが達せられた。それをわたしの大用としているのだ。」

われをしてよく用あらしめば、且この大あるを得んや。役立たぬからこそこの巨木に成長することができた。役立たないことが役に立つ、というのが莊子の説く「無用の用」である。莊子はこの*パラドックスをほかにもさまざまな比喻で説いている。莊子こそ伸縮自在の物さしを持つ真のユーモリストであった。

ジョークで始めた本書をジョークで締めくくっておこう。

「盲腸はなんの役にも立ちませんね。」

⑥ () には必要だ。」

(注*) パラドックス：逆説。「急がば回れ」のように、一見真理に反する言い方だが、よく吟味すれば真理である説。

問一 〓(a) 〓(d) の、カタカナを漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 ①「その過程で」は、どの語句にかかっていくか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア 笑いを起こす イ 原因の多くが ウ 先人観や常識を エ 破壊することによっている オ 気がついた

問三 《人名1》 〓 《人名4》 に入る適当な人名を、次の中からそれぞれ選びなさい。

ア アインシュタイン イ ガリレオ ウ ケストナー エ ピカソ オ ルイス・キャロル

問四 ②「第二の固定観念」という意味での常識はつねに破壊することをころがけたほうがよい」とあるが、そうすることの

利点として筆者が具体的に述べていることを二つ、それぞれ三十五字以上、四十字以内にまとめて答えなさい。

問五 ③「常識が見落としがちな (i) (ii) を指摘し、その面を強調する」とあるが、(i) (ii) に入る組み合わせとして最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア (i) 1・A (ii) 1・B	イ (i) 1・A (ii) 2・A
ウ (i) 1・A (ii) 2・B	エ (i) 1・B (ii) 2・A
オ (i) 1・B (ii) 2・B	カ (i) 2・A (ii) 2・B

問六 ④「二分法の世界に安住する観念の固定した人には、それが俗にいう「X」、「Y」と見えるのである」とあるが、これについて次の各問いに答えなさい。

(1)「二分法の世界に安住する観念の固定した人」と同じことを述べた表現を本文中から二つ抜き出しなさい。

(2)「X」、「Y」に入る語の組み合わせとして適当なものを次の中から選びなさい。

ア [X] アマノジャク	[Y] ガンコモノ	イ [X] アマノジャク	[Y] 石頭
ウ [X] アマノジャク	[Y] ヘソ曲がり	エ [X] デクノボウ	[Y] ヘソ曲がり
オ [X] 石頭	[Y] ガンコモノ	カ [X] 石頭	[Y] デクノボウ

問七 — ⑤「夢に木の霊があらわれ、つぎのように語る」とあるが、「木の霊」はどのようなことを言いたいのか。「ということ。」につながるように、会話文以外から十二字の言葉を抜き出さない。

問八 — ⑥「() には必要だ。」の () 内に入る適当な言葉を考え、漢字二字で答えなさい。

問九 本文において筆者が述べていることとして適当でないものを、次の中から二つ選びなさい。

ア 笑いを起こす原因を知れば人間の観念がどのように固定化してゆくのか、その過程を知ることが可能になる。
イ 〈常識〉は、いわばルールとしての常識と、先入観や固定観念という意味での常識と、二種類に分けられる。
ウ 人はいいか悪いかという二分法の価値判断をしがちだが、それだけでは観念が固定化しやすくなってしまう。
エ ユーモア感覚を持つ人のゴムの尺度は、どんな価値にも対応できる伸縮自在で、かつ唯一絶対の尺度である。
オ 観念の固定は、多くの対立や摩擦を生み、自由な発想を妨げ、多くの人間を不幸にしたという歴史すら持つ。
カ 自由な発想でどんなパラドックスもた喩え話にできる表現力を持つ莊子こそが、真のユーモリストだと言える。